在日外国人支援の現場における参与実践（2010 年度までの総括）

池田光穂

本研究プロジェクトは「在日外国人支援の現場における参与的実践」である。平成 19（2007）年 10 月から始まった初年度の課題名は「在日外国人への医療・福祉・教育支援の現状と課題：参与実践の方法からみえてくるもの」と銘打っていたが、翌年度からこの課題名に変更した。変更の理由は「コンフリクトの具体的な現象」について仔細に検討するためには、問題が起こっている領域、すなわち医療・福祉・教育に焦点化するのが賢明だが、具体的支援やそのための人材育成を目的とする「国際研究教育拠点」形成のためには、その領域を包括する問題が抱えるコンフリクト解決に踏み出せるような実践的方法についての研究開発が欠かせないと判断したためである。他の研究グループには、医療・福祉・教育領域におけるコンフリクト問題の分析と実践の専門家も多くおり、重複を避け、独自性を出すためへの変更となった。

初年度は、個別実態研究、成果報告を前提とした共同研究会の開催、海外拠点とのネットワーク形成と、かなり欲張りなロードマップを描いた。同 2007 年度に、医療通訳の現状を把握するためオーストリア連邦シドニーに調査を行い、国内の関連学会や研究会に現在まで参加している。しかしながら、日本における医療通訳の現在進行中のプロセスは、中央政府、地方自治体、企業化した医療法人、私自身も発起人として関わっている団体を含む通訳翻訳関連学会、市民団体など、それらの動きは、きわめて流動的かつ群雄割拠である。とりわけ、俗に「専門家」と呼ばれている影響力をもつ人たちにおいては気まぐれで冗長（redundant）な「余計な介入」とも思える動きがある。そのような動態や情勢を見聞きするに及び、コンフリクト解消どころか現在それに関わっている「専門家の役割」は、むしろコンフリクトの局所化（localization）という混乱の原因になっているのではないかという心証まで抱くようになったのが正直なところである。

それゆえに平成 20（2008）年度から実践的関与に関する方法論とその理論についての研究に重点を移すようにしたのは、現在の職場での研究や授業とも関連づけて、私の得意とする領域―もともと応用医療人類学の批判的研究から現在の仕事にアプローチしてきたので―に近かったからである。2008 年 7 月には国際医療関係の学会で、医療的多元化（medical pluralism/pluralization）を推し進めることと、外国人に対して医療や福祉サービスを受ける普遍的人権を市民社会に定着させることは、矛盾しないことを指摘した。加えて、ニューカマーズに関わる社会活動は、参与実践（participant practice）であり、多文化社会状況を促進させる医療通訳者を、仲介的実践者（mediative practitioner）として位置づけることが、来るべき市民社会では重要な役割になることを主張した。今日しばしば見られる、通訳者の一元的資格化や専門職集団の規範化としての倫理要綱の策定という、既存の専門家の職業独占をモデルにしたやり方は、非常にフレキシブルな国際人流とグローカル化する社会の変化に対応できないどころか、人種主義的な政策からいまだに脱却できない国民国家の統治システムに補完的機能すら与えることが明確になりつつあることを、これまでの研究の過程で見いだすことができた。そのような「専門家の善意」にもとづく構造的暴力への加担を回避するため、アクションリサーチに淵源する CBPR（コミュニティに基づく参加型研究）や、コンフリクト解消を模索する当事者への成人教育学（andragogy）領域で一定の歴史的評価をもつ、パウロ・フレイレの意識化（conscientization）、対話論理論（dialogism）、正統的周辺

参加（LPP）、問題に基づく学習（PBL）などについて、これまで開催してきたワークショップなどで紹介してきた（2008ー2010 年度）。また「渡日外国人労働者に対する構造的暴力」について関連学会や研究会などで、研究者集団に紹介し、その実例を報告してきた。さらに平成 22（2010）年度からは EPA（二国間経済連携協定）によるフィリピンおよびインドネシアからの介護福祉士・看護師候補研修生への日本での支援活動の研究に関わり、同様の観点からその分析を遂行中である。

このような研究上の成果として、平成 22（2010）年度にはグローコルからの共同研究会「先住民・エスニックマイノリティのディアスポラとグローバリゼーション」という学内の競争的研究資金を獲得できたという結果に繋がった。教育面では、高度副プログラム「グローバル共生社会」に関わり、本年度平成 23（2011）年度からの CSCD 科目「グローバル共生社会論」においては、応用人類学・開発人類学・公共人類学の実践的側面に主力を置いた大学院生向けの授業に反映させている。

最終年度は、他のプロジェクトチームと同様に、（１）報告書のとりまとめと（２）成果の社会還元ならびに公表活動としての商業出版の模索、および（３）この研究成果にもとづく研究と教育活動をサステイナブルにする新たな外部資金の調達（科研費、JST、民間基金等）活動を本格化する所存である。

研究成果のウェブによる報告

※ファイルはすべて http://www.cscd.osaka-u.ac.jp/user/rosaldo/ のディレクトリー上にあるものである。

■時系列による情報公開

医療と文化の多元主義：日本事例の検討（2008 年 7 月 5 日）：080421multupolitico.html

文化の翻訳に資格はいらない（2008 年 10 月 5 日）：081006JPSIT.html

在日外国人支援のためのコミュニティにもとづく参加型研究(CBPR)の可能性：CBPR2008_Japan.html

在日外国人支援のための社会調査技法について（2009 年 1 月 10 日）：090110biwako.html

臨床コミュニケーションとしての医療通訳（2009 年 1 月 28 日）：090128Translator.html

在日外国人支援の現場における参与実践 2009（2009 年 4 月 18 日）：090418multicultural.html

保健医療社会学における「問題にもとづく学習」手法の可能性について（2009 年 5 月 16 日）：090519med_socio.html

医療通訳というお仕事：現場からの報告（2009 年 12 月 2 日）：090520Trans.html

渡日外国人労働者に対する構造的暴力：保健医療への人類学的アプローチ：100219SVbiwako.html

多元化する日本社会（2010 年 5 月 10 日）：100425GC.html

コミュニティ通訳の必要性ー多文化共生医療（2010 年 10 月 17 日）：101017community.html

Handmade Life: Exploring The Environmental Consciousness and Subcultures ：101111ecoeco.htm

ハンドメイドな生活：日本とタイの青年サブカルチャーとエコ意識について探究する：101111eco.html

コミュニティについて考える：多文化共生論と実践的医療人類学（2010 年 12 月 3 日）：101111cccn.html

方法としてのアジア：脱帝国主義化とディアスポラ（2011 年 2 月 5 日ー6 日）：AsiaAsMethod2011.html

■テーマ資料

多文化共生社会：071229multi_ethnic.html

医療通訳と人権を考える（2006 年 4 月 16 日）：060410Medint00.html

医療と人権：文化人類学の観点から考える（2006 年 3 月 28 日）：060401humanrigh.html

わたくしの研究関心：2006-2008：061211gen.html

子どもたちによる「こくさい」れんたい：070608childinter.html

さまざまな〈ブンカ〉：「文化」の日本語の用法を考える：071228bunka.html

多文化共生はじめの一歩：071228mulethnic.html

医療労働市場と医療労働者の国際移動に関する研究：11033medicalabour.html

構造的暴力：09violencia_estructura.html

コミュニティにもとづく参加型研究：ＣＢＰＲ：090420CBPR.html

コミュニティ通訳の必要性ー多文化共生医療：101017community.html

多文化共生保健コミュニケーター：仮想シラバス：060620multietnic.html

多元化する日本社会の試練：学校文化のなかでの多文化主義：100427_08.html

多文化共生に関する大学・大学院教育の現状：080701mult.html

現代日本の大学教育に担わされている期待とは？：071228daigaku.html

ディアスポラ研究基本文献：100621diaspora.html

EPA にもとづく看護師・介護福祉士候補者の受け入れ制度について考える：100223FTA_EPA.html

日本における先住民問題［課題と資料］（2010 年 5 月 17 日）：100510GC.html

移民討議班レポート（2010 年 5 月 22 日）：100601immigration.html

先住民がもたらす「文化と政治」概念の再考という提案から学ぶ：11033KulturPolitik.html

先住民の帰属アイデンティティと社会実践：新しい「文化」と「政治」概念への挑戦：100721indigenous.html

移民班・討議資料

報告書構成

第一章　序論：総説と書籍の内容紹介（池田）

第二章　執筆者１

第三章　執筆者２

第四章　執筆者３

第五章　執筆者４

第六章　執筆者５

第八章　執筆者６

第九章　学習ガイド（コメントつき文献リスト）

１．名前：中村安秀

２．今後の連絡用メールアドレス：

３．論文標題：「在住外国人の保健医療の課題（仮題）」あるいは、「外国人が健康に暮らすために」

４．執筆する内容：在住外国人の保健医療の現状をレビューした後、日本の医療通訳や医療ツーリズムの現状を批判的に分析し、日本の医療通訳システムのあり方を提言する

５．その他・コメントや御提案など：とくになし

１．志水宏吉

２．

３．「国際移民の教育戦略---日本在住外国人の事例から」

４．２つ以上の国に生活基盤をもつ人々を「国際移民」と位置づけ、日本における彼らの子育て・教育に対する考え方・行動を、社会学的な観点から解明したい。

１．お名前：山本ベバリー

２．今後の連絡用メールアドレス：

３．論文標題：「親密な関係の交渉　---　在日の国際結婚カープルの生活史研究」（仮題）

４．執筆する内容：2 組の在日している国際結婚カップルの出会いからもうそろそろ 20 周年の結婚記念日を迎えるまでの比較的な生活史研究をする。特に夫婦や親や嫁／婿などとしての親密な関係への交渉に焦点を当たる。コンフリクトのきっかけや解決戦略なども比較する。

５．その他・コメントや御提案など：

１．お名前：池田光穂

２．今後の連絡用メールアドレス：

３．論文標題：もし多文化共生社会をめざす市民がパウロ・フレイレを読んだら：もうひとつのアクションリサーチのすすめ（仮題）

４．執筆する内容：CBPR（コミュニティに基づく参加型研究）の手法をパウロ・フレイレ流にアレンジをして、使えるマニュアルにするにはどんな具体的なやり方があるのか、仮想の移民の送出社会と受け入れ社会（東アジアのある国々を想定）という複眼的論点から整理して考えてみる。

５．その他・コメントや御提案など : 研究上に役立つだけではなく、市民にも考える機会をつくったり、なにかの実践を触発するような本づくりに励みましょう。

（参加した今日のあなたのプロジェクトについて書きましょう）

１．お名前：

２．今後の連絡用メールアドレス：

３．論文標題：

４．執筆する内容：

５．その他・コメントや御提案など：